

## 話し合い活動へのステップ 2

前は、×をつけるところまで書きました。

これは本校の、言語技術で言うところの「立場」に当たります。

「立場」を、個々人が決めることは、話し合い活動のはじめの一步であり、また最低条件でもあります。

## 理由をつける

次に指導すべきことは、前項で言った「立場」に理由をつけて話すことです。

こう書くと「ああ話型を教えるのだな」と早計に思いがちです。

しかし、それは違います。

話型はあとで導入するのです。

話型よりも先に教えるのは、理由をつけて話すという体験そのものです。

例えばこんなふうです。

1年生の国語の教科書のはじめはたいい「春」を感じさせる絵が描かれています。

それを、示しながら『先生ね、この絵ね、冬だと思うんだよ』と言います。

すると、子どもたちは、

「えー！」とか「ぜったいちがうよー！」とか言います。

そこで、『じゃあ、いつなの？』と聞き返します。

子どもたちは、一斉に手を挙げます。

教師は、一人を指します。

「ぜったい春！」

『どうして？』

「だって、お花咲いてるもん」

『へえ、でも夏でも咲くから、夏だな』

子どもたちは、熱狂します。

もう一人指します。

「ぜったい春！」

『どうして？』

「地面が、緑色だから」

『夏だって、緑だもん。だから夏だもん』(後略)

こんなふうに、意見を言う、そして教師から『どうして』と理由を尋ねられて理由を言うという体験をいっぱいやるのです。

こういう楽しい体験をしてから、「今度は『春だとおもいます。だって～だからです』と言ってごらん」と話型を導入します。

すべての学習は、技術先行、技術優先ではいけなくて、こういう楽しい体験の後に与えられる技術こそが子どもたちにとって意味のあるものとして残るように思います。

立って発表する度胸をつける

さて、「意見」＋「理由」という話型を教えたら、子どもは発表できるようになるのでしょうか。

実はそうではありません。

遠回りなような気がしますが、次のような指導が必要です。

教師による「連れ読み」

これは、国語の授業で教師がよくする指導です。

教師が、一文節なり、句読点まで読んだら、子どもがそのあとを読むという音読指導です。

「一人読み」

国語の教科書の1ページ分連れ読みをしたら「全員起立！今の処まで読んだら座る」というふうに指示します。

子どもが読んでいる間、教師は二つのことをします。

一つは、音読の苦手な子への援助です。

横で小さな声で読んであげる、行を指さしてあげるなどです。

更にもう一つは、はじめに座った子どもと最後に座った子どもとの時間差を計ることです。

このことが、全体の学力差や上達を見取る科学的な方法です。

また、読み終わって座った子どもには「座っても読んでいなさい」と指示します。

いわゆる「空白の禁止」というやつです。

ところで、「座っても読んでいなさい」と言うような指示は、はじめの指導の時くらいでいいのです。

この指示は、2回目からは、指示されなくても読んでいる数名を「君は、先生が前の時間言っていたことをよく覚えているなあ」と褒めてあげることに変換されます。

このように、指示しなくても、動けるような効果を持つ指示を「隠れ指示」とか「ヒドゥンカリキュラム」と言います。

実は、前号で書いた築地久子氏の授業は、授業中教師がほとんど発言しなくても進行するため、一見何も指導していないかのようですが、この「隠れ指示」が子どもの中に随分働いていることにビデオを丹念

に見ると気がつきます。

筑地氏に限らず、優れた実践家というのはこの「隠れ指示」をたくさん使っています。

そして、いわゆる学習技能が育っている状態というのは、「隠れ指示」がクラスに増えている状態とも言うことができるのです。

つまり、「言わずともできる」という状態になっているということです。

#### 「ペア読み」

これで、子どもたちは一人につき2, 3回読んだことになり、一応読めると言う状態になっています。

しかし、「正しく読めている」かどうかは定かではありません。

そこで、ペアにして、一文交替読みをします。

これで、ある程度間違いは是正されてきます。

しかし、念のためです。

#### 「グループ読み」

更に念のためグループで一文交替読みをします。

これで、子どもたちの間違いはほとんどなくなります。

#### 「順番一人一文読み」

一人一人がすらすらと読める状態になっています。

次はいよいよみんなの前で立って読むという指導段階になります。

順番を先に決めておきます。

教室の廊下側の列の子から、後ろの子へと回します。

この際、一人目の子が立って読んでいるときに、次の子は立って待っています。

そして、一人目の子が一文読み終わり座ったら、三人目の子が立つという要領ですすめていきます。

これは、一週間も毎日やればよどみなくできるようになります。

#### 「タケノコ読み」

今度は順番を決めません。

読みたいところで、読みたい人が立ち上がって読みます。

数名立つこともあります。

気にせず、立った人全員が読みます。

## 「指名なし音読」

全員の机・いすを教室の中央に向けます。

つまり全員の顔が見える状態です。

それから次のように指示します。

『今度は、読みたい人が、たった一人で読みます。次に、読みたい人は立って待っています。何人が立ったときは譲り合ってください』

こう指示すると、はじめは顔を見合わせたりして、多少ぎくしゃくしますが、やがてスムーズに読めます。

また、あと2, 3文というところで、「まだ読んでいない人起立。読んだら座る」と指示すると、声を出していない子というのもなくなくなるわけです。

これが、いわゆる「指名なし音読」という方法です。

こうした一連の指導は、音読の習熟を指向しているように一見思えますが、それ以上の効果を子どもたちに生み出します。

それは、人前で声を出すということです。

そして、声を出すことで人に影響を与えることができるという実感です。

現在の文化は無声文化です。

メール、インターネット……そして、大人たちは子どもが要求する前に何かをしてくれます。

自分から声を出し何かを要求せずとも、あらゆる事が運ぶのです。

## 「指名なし発表」その1

前項で書いた音読指導は、あくまで音読指導でしかないので、いくらそれだけを繰り返しても「話し合い活動」に発展することはありません。

今度は、指名なしの形式を借りて、子どもたちに発表させます。

このときの発問は次のようなものです。

「長篠合戦の絵を見て、気がついたことをできるだけたくさん書きなさい」

「窓の外を見て気がついたことを、できるだけたくさん書きなさい」

「先生の今日の服装について、気がついたことを、できるだけたくさん書きなさい」等々

つまり、「～なのは、どちらか」や「もっとも　なのは、いずれか」というような「収束的発問」ではなく、「　　なのをできるだけたくさん書け」というような「拡散的発問」をすることです。

あわせて、はじめは例示してあげるといいのです。

例えば、長篠合戦の絵でたくさん書きなさいと言っているときは、「人がたくさんいる」「空がある」...  
...なんて例示します。

すると、子どもたちは「なんだ、そんなことでいいのか」と安心するわけです。そんなことならたくさんかけるぞ、と。

あわせて、重要なポイントがあります。

一つ書けたら、先生のところに持ってきなさい

それで、子どもが持ってきたら、とにかく褒めてあげるのです。

ここが肝腎です。

今まで学習に自信がなかった子も、だいたい持ってくるのです。

ここでうんと褒めてあげて、必ずしっかりと をしてあげるのです。

そして、時々持ってきた子どもの書いていることを大きな声で読み上げてあげるのです。

この取り上げる文章は、「すごい発見」「ふつうの発見」「誰でも見つけられる点」のうち、「誰でも見つけられる点」を選ぶのです。理由はおわかりですね。

「2つめから、持ってこなくていいからどんどん書きなさい」と指示します。

次に、一段落したら、「まだ持ってこない人？」と聞き、「途中でもいいから先生のところに持っておいで」と言うのです。

「できていない人」とは言わずに、「途中でいいから.....」と言うのです。

教師は、自分の未熟さを棚に上げて、子どもたちを傷つけてはいけません。

無神経な教師は、自分の非力さにも、子どもの傷にも気づきにくいのです。

およそ目安は、少なくとも7分です。

私は、1時間やらせたこともありました。

さて、いよいよ発表です。

全員、机といすを 君（教室の真ん中に座っている子）に向けなさい。

これからノートに書いてあることを発表してもらいます。

今日は、ほかの人とダブってもいいから、全部言ってもらいます。

言いたい人が、立って言います。

次に言いたい人は、立って待っています。

ここで、総括型の話し方も指導します。

私が見つけたことは です。

一つめは～ 二つめは～ 以上です。

と言うような文体を教えます。

この文体は、はじめは教えますが、段々どうでも良くなってきます。

子どもたちの表現がこなれてくるからです。

守破離（元々、室町の三代将軍足利義満の時代に、観阿弥、世阿弥親子によって開かれた「能」の至芸に至る段階を示す言葉）という言葉の通りです。

次に、必ず褒めるべきポイントがあります。

それは、

- ・ 一番に話した子
- ・ 立つ子がないときに立った子
- ・ 普段発表しない子

です。

### 「指名なし発表」その2

「その2」は、聞き手に重点が置かれていきます。

「その1」では、とにかく発表することに重点が置かれますので、重複して同じ内容を発表してかまわないのです。

しかし、話し合いを効率よく勧めるためには重複意見を省きたいのです。

そこで次のように指示します。

いつものように、先生は指名しません。

今日は、もし他人がいった意見と同じようなことを自分も書いたという場合は、赤鉛筆でチェックしてください。

そのチェックしたものは、自分が発表するときには発表しなくてもかまいません。

このようにすることで、意見の重複を避けることができます。

### 「指名なし討論」

話し合うためには、「話す」と「合う（応じて話す）」を教えなければなりません。

この両方ができて、初めて「話し合い」ができます。

まででできたことは、「話す」ことだけです。

「応じて話す」指導がここから必要です。

さて、何をすればいいのでしょうか？

先ずはじめに、学級が二分するような発問をします。

例えば、次のように問います。

長篠合戦の絵に描かれている各軍の旗は、敵に見せるものであったか。それとも味方に見せるものであったか？ ノートにずばり書きなさい。

先述した収束的発問で、一気に学級を2分します。

この発問は、学級がおよそ半々になることを私は知っています。

このあと、すぐに「まだ書かない人？」と訊ねます。

つまり、「発問＋指示＋作業＋確認」という流れを授業につくるのです。

そして、挙手によって分布をとります。

ここでは、全員が必ず手を挙げていることが確認できるまで分布をとります。

つまり、全員参加の原則を貫くわけです。

さて次に、「その理由をノートにできるだけ書いて持っていらっしやい」と指示します。

ここは、「指名なし発表」の時と同様にします。

そして、意見を指名なしで発表させます。

その間、次のようなメモをノートにさせます。

敵

山田 威圧する

笹森 作戦に利用

.....

味方

鈴木 はぐれたときの目印

千田 命令を出す

つまり、「名前＋理由（単語）」を書かせるわけです。

はじめは、教師と一緒に黒板に書いてあげます。

ここでは、書く力と要約力が培われます。

中々はじめはできませんが、授業終了時全員分のノートに目を通して を付けてあげて、励ますことです。

さて、こうして意見表明と同時に子どもたちのノートには、メモが書き上がります。

次にこのように指示します。

相手の意見に反論しなさい。

私は正しいという意見ではなく、「あなたは間違っている。なぜなら～」という文を書くのです。

こういうのをノートにたくさん書きなさい。

これを、10分くらいやったあと、ストップをかけ「発表したい人どうぞ」と促します。

すると、反論が始まります。

同じような反論を持っている子は、まとめていった方がいいので、立たせておいて次に言わせます。

同じ相手への反論がなくなったら、反論された子が反論への反論をします。

こうして、「反論 反論への反論」という連なりで議論を進めていきます。

こうした「指名なし討論」がよどみなくできるようになるまでに、やはり1年はかかるのです。

いや、もっと力量のある方がやれば早く指導できるのかもしれませんが。

私は、45分間、教師が全く口を挟まずに子どもだけで討論をするという状態を、1年かけてしか指導できませんでした。

指名なし討論を超えて

さて、指名なし討論をしていて、私は一つの疑念にとりつかれました。

それは、次のようなことです。

この討論の方法は、効率が悪いのではないか？

指名なし討論は、話し手が常に一人なのです。

ひどいときになると、1時間で発表する子は5名程度であったりします。

ほかの子は、1時間ただ座りメモをとって聞いているだけな訳です。

私は、授業の終わりに必ず授業の感想や、今のところの意見をノートに書かせてきました。

すると、発表していない子どももきちんと学習に参加していることが分かりました。

しかし、しかし、です。

あまりに学習効率が悪いのではないのでしょうか。

そこで、私が考えた方法は、「マイクロ討論会」という方法です。

「指名なし討論」と比して、私のいう「マイクロ討論会」は、人数規模が小さいものを言います。

低学年なら、ペア。

中学年なら、4人。

高学年なら、6人。

この規模で行います。

すると、指名なし討論に比べて、さうとう発言者が増えます。

その上、小グループでの討論ですので心的抵抗も少ないです。

やり方は、指名なし討論を小グループでやると理解すればいいのですが、一点違うところがあります。それは、少人数なので、ダイレクトな聞き手のリアクションをつくりたいということです。例えば、こんなモデルを見せます。

A 私は、旗は味方に見せていると思います。  
他 ああ僕も同じだよ良かった。  
私とは違う。どうしてそう思うの？  
A 理由は3つあります。  
他 3つもあるのすごいなあ。  
僕は一つだったよ、君すごい！  
A 一つめの理由は、たくさんの味方がいるので、  
他 いるいる！  
何人くらいいたかなあ！  
僕数えたよ、54人！  
A たくさんいるから、間違っただけを殺しちゃったらいへんだからです。  
他 僕も同じ事書いたよ。  
.....

つまり、リアクションを細かくさせるということです。  
これで、常に反応することが必要ですから、頭をたいへん使うことになります。  
リアクションの内容もある程度整理されていると良いでしょう。  
次のように。

繰り返し～相手の意見を繰り返して、聞いているんだよというサインを送る。  
異化・同化～「私も同じ」「僕は違う」ということを知らせる。  
感想（称賛）～「君すごいなあ」「君そんなに書いたの！」  
質問～「もう少し詳しく教えて」

これくらいのことが、できると良いですね。  
さらに、この「マイクロ討論会」が終わったら、次のような指導をしたいです。

あなたのグループの代表的な意見を、3つグループで選び出し、話し合い全体をまとめなさい。

これに、相互評価なども入れると、さらに討論の方法として安定します。

追記 これだれか実践してくれないかなあ。